

自立した進路選択をサポートする進路の手引き作り

進路選択の流れを理解させ 主体的な進路学習を促す

生徒が進路選択の過程で使用する進路の手引きを充実させ、生徒に役立つものにするには、どのようなことが求められるのか。ここでは手引きを10章立てとして、それぞれのポイントを確認し、生徒の主体的な進路学習を促す進路の手引き作りを考えよう。

はじめに 手引きのスタンスを 明確に決める

進路の手引きはともすると、進路・進学に関する情報をなんでも詰め込んでしまい、かえって全体が見えにくい、

スタンスがはっきりしないものになりがちである。生徒に手引きをどう使ってもらいたいかを明確にすることが必要なことであり、それがはっきりすれば、手引きのスタイルも自ずと決まってくる。

どういったスタンスにするかについてはいろいろ考えられるが、情報の網羅データ集的なものよりも、高校3年間を通じた進路学習の流れがわかるものをめざしたい。進路学習の流れに沿って、自分自身で自らの進路の方向性を見だし、考え、選択できる生徒を育てることを目標として、進路の手引きを作りたい。

進路の手引き構成案(各章に盛り込む項目)

- 1章 進路選択の心構え
進路選択の必要性の訴えかけ / 高校3年間の進路選択の流れ
- 2章 3年間のスケジュール表
3年間の学校行事 / 進路選択と学習の目標の提示
- 3章 職業研究
職業研究への取り組みの訴えかけ / 関心を高めるための職業紹介 / 職業研究を進める方法や参考資料の紹介
- 4章 学問研究、学部・学科研究
学問、学部・学科研究への取り組みの訴えかけ / 中身がわかりにくい学問の紹介 / 学問、学部・学科研究を進める方法や参考資料の紹介
- 5章 文理選択のしくみ
文理選択の心構え / 文理それぞれのカリキュラムなど、具体的なコースの違いがわかる資料
- 6章 大学入試のしくみ
入試のしくみの解説 / 入試について調べるための資料の紹介
- 7章 成績の見方
評定平均値など高校の成績の見方 / 模試の成績のとらえ方
- 8章 志望校、受験校決定
志望校決定の視点 / 受験校決定の際の注意点
- 9章 合格体験記
生徒の意欲を高め、参考となる体験談
- 10章 保護者のページ
子どもと進路を考える重要性 / 学費や生活費、就職状況など、保護者の疑問を解消する資料

1章 進路選択の心構え 将来の志望と学習の 意義を結びつける

生徒の中には勉強する目的が見いだせず、学習に対する意欲の低い者がいる。また、そうでない生徒に対してもさらに学習に前向きに取り組ませるために、なんのために勉強するかという根本的な意味づけがここでは求められる。したがって、最初の章では「なぜ学ぶのか」「高校でどのように過ごすか」が骨格となる。

やがて社会に出たとき、自分がどういう生き方をしたいか、どういった職業に就きたいかといったことに生徒の目を向けさせるのが、最初の一步となる。そして、将来の「なりたい自分」に近づくためには、どういった道筋を歩むことが必要か、それにはどんな勉強をすべきかなどについて、「考えてみよう」と生徒に訴えかけるような内容にした。それが生徒の学習意欲を刺激する本筋であり、また、その道筋を考え、調べるのが進路学習ということになる。

勉強も進路学習も教師から押しつけられて行うものではなく、なによりも

自分のためにするものであること、たった一度の人生を豊かなものにするために、これらが必要であることを強調する必要がある。

この進路学習の根幹となる部分がいまいなままだと、やがて受験勉強の時期になったとき、生徒の中には「なんのために勉強しなければならぬのか」という疑問が再び頭をもたげ、足元がグラつく者も出てくる恐れがある。

高校3か年の進路学習は、自己理解 職業研究 学問研究 学部・学科研究 志望校選択といった道筋をたどることとなる。進路の手引きの巻頭となるこの章では、その流れを示し、生徒に進路を考える道筋を理解させるようにする。

2章 3年間のスケジュール表 指導の流れがわかる スケジュール表を

ここには、体育祭や文化祭といった学校ぐるみの年間行事だけでなく、「この時期にこういう進路指導を行う」「生徒にはこんなことに取り組んでもらいたい」というものも含めて載せたい。

スケジュール表の例(高2・2学期)

行事	<ul style="list-style-type: none"> ・文化祭 / 体育祭 ・模試 ・進路講演会 ・期末テスト ・校内実力テスト ・面談 ・中間テスト
進路学習の目標	<p><志望校選択を意識した進路学習></p> <ul style="list-style-type: none"> ・なにを学びたいのかという観点から、学部・学科研究、大学研究に結びつけていこう。 ・きみが本当に納得できる進路を見つけられれば、学習への意欲と持続力につながる <p><進路学習のポイント></p> <ul style="list-style-type: none"> ・やりたいことの再確認 ・学部・学科研究を深める ・大学研究
学習の目標	<p><受験の態勢作り></p> <ul style="list-style-type: none"> ・高3になって受験態勢作りを始めたのでは間に合わない。早めにスタートするために、冬休みまでになにをやればよいかを見極めよう ・予習 授業 復習の基本サイクルを再構築すると同時に、学習時間の絶対量を増やすようにしよう <p><テストを軸とした学習スタイルの定着></p> <ul style="list-style-type: none"> ・入試を意識し、定期テストや模試を軸とした学習スタイルを定着させよう ・模試は準備して受けるものである。準備 受験 復習を繰り返して初めて合格する力がつく。また、模試で発見した弱点の克服が受験学力の向上につながる ・大学入試の英語、国語などは、総合的な学力が求められる傾向にある。したがって、視野を広げることが学力アップにつながる

むしろ、そちらの方がここでは重要となる。具体的には職業研究、学問研究、学部・学科研究、保護者会、面談、文理選択、志望校調査などが考えられるだろう。

また、進路の手引きに掲載するスケジュール表は生徒に役立つだけでなく、教師にとってもどの時期にどういった指導が必要か、体系的、時系列的に再確認できるという利点がある。また、スケジュール表に行事予定を載せておけば学年団をはじめとした教師が、それらの行事に向けての環境作りに対応することができる。

LHRでなにをやったらいいか、テーマに困っている担任は少なくない。指導上のポイントを左のようにスケジュールとして出してあげれば、担任にと

ってもLHR運営の際に有用となるだろう。職業研究、学問研究、学部・学科研究など生徒にレポートを書かせるものは、LHRで比較取り組みやすいテーマでもある。

実際にどういったテーマを、いつごろ盛り込むかについては各高校によって異なるが、過年度の指導事例を参考に、年間テーマを組み立てていけば自ずと決まってくるだろう。

しかし、あまり細かい内容まで規定すると、がんじがらめになって身動きがとれなくなるので、ある程度の融通性を持たせることが必要だ。各担任が創意工夫を発揮できるように余地も残してスケジュールを作れば、生徒、担任ともに活用できるものができるだろう。

3章 職業研究

研究の流れを示し 生徒に調べさせる

まず、なんのために職業研究をするのかをはっきり伝えることが大切だ。自分の生き方を考え、それを実現するために職業がある。職業研究は生き方研究であることを理解させたい。

したがって、今流行っている職業と安定している職業、待遇のよい職業といったことばかりにとらわれないように生徒に釘を刺しておく必要がある。そういったアプローチのしかたは、必ずしも「なりたいたい自分像」と合致するとは限らない。それに、現在安定している職業、待遇のよい職業も、社会が激しく動いているこの時代、生徒が社会人になるころにその地位を保っているかどうかかわからないにも触れておきたい。

自分はこいつの生き方をしたい、そのためにこの職業に就きたいというアプローチがやはり不可欠である。こうした点をきちんと認識させて、職業研

究の具体的なやり方を示す。

生徒は案外限られた種類の職業しか知らないで、職業研究は世の中の職業について視野を広げることからスタートする。そのうえで、なりたいたい職業はなにか、それは具体的にどういう内容の仕事をするのか、どういうタイプの人が向いているのか、将来どんな道が開けているのか、なりたいたい職業に就くためにはどういった勉強や資格が必要かといった項目について調べてみるように生徒の行動を促す。

ここで大切なのは生徒に自分で調べさせるということである。冒頭で述べたように、この章に職業についての情報を網羅的に盛り込む必要は必ずしもない。職業総覧のようにおよそ考えられる職業の名前を羅列する方法もあるが、それよりも職業研究の手順を示して、具体的内容については生徒の手で調べさせることの方が大切である。ただし、研究のしかた、必要な文献・資料などについては具体的に示す必要がある。

職業研究の具体的な取り組み、そのための資料としては次のようなものが考えられる。

- ・教師による生き方を考えさせる本、職業を考えさせる本の推薦
- ・『職業まるわかりBOOK』の活用
- ・社会人による講演会の実施
- ・公的機関(裁判所など)の訪問
- ・企業訪問の実施
- ・ボランティア活動への取り組み
- ・卒業生との交流会の実施
- ・インターネットの活用

こうした取り組みは、ただ実施しただけで終わらせずに、生徒に自分の頭で整理させ、考えさせることで、より実り豊かなものになる。

実施したらレポート(その職業に引かれる理由、必要な勉強、資格、今後の展望など)を書くように一言つけ加えておきたい。手引きの中に、生徒がレポートとして書き込むことができるページをあらかじめ作っておくのもよいだろう。

関連する職業を示して視野を広げる

この章を職業総覧的なものにする必要は必ずしもないが、生徒が職業に就くまでの道筋を具体的にイメージできるように、具体例としていくつかの職業のルートを挙げるのはよいかもしれない。職業研究に限らず、進路学習は

また、医師や弁護士など、資格試験が難関で就くのがかなり難しい職業については、関連するそのほかの職業を示して視野を広げさせることも必要となる。例えば医師なら、医療関係の職業として看護師(士)、理学療法士、診療放射線技師、臨床検査技師、薬剤師などがあることを伝えたい。

4章 学問研究 学部・学科研究

イメージだけで 選ばせない

学問研究、学部・学科研究には二つのアプローチのしかたがある。一つは職業研究によって「社会に出てなにをやりたいか」「どんな職業に就きたいか」を絞り込んだ結果に基づいて、それを実現するにはどういった学問を学ぶ必要があるか、その学問はどの大学のどの学部・学科で学ぶことができるかを研究するアプローチ。もう一つは「大学で 学を勉強したい」という学問に対する興味・関心がある程度はっきりして、その観点から学問、学部・学科について詳しく研究するアプローチだ。

以上のように、学問研究、学部・学

名前が似ている 生徒が混同しやすい学問例	
外国文学	外国語学
地理学	地球科学
法 学	政治学
経済学	経営・商学
社会学	人間科学
電気・電子・通信工学	情報工学
物理学	応用物理学
生物学	生物工学
保健学	看護学

科研究への入り方は二通りあることを示しておけば、生徒は心理的に余裕を持って研究に入ることができる。この二つのアプローチを学問研究、学部・学科研究の概念図として手引きに載せておくのも一案だ。

生徒は学問、学部・学科の内容について、名前から連想するイメージだけでとらえ、実際の研究内容をきちんとかんがえていないことが少なくない。特に名称が似ている学問の場合には要注意だ。例えば、外国文学と外国語学、経済学と経営・商学、生物学と生物工学などがそうだ。

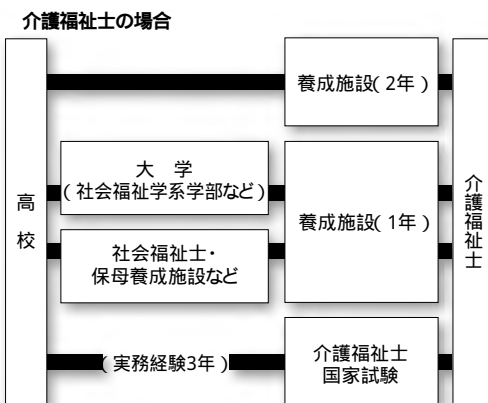
また、最近増えている学際系(総合科学や人間科学など)についても、学部・学科名だけでは内容がわかりにくいものがある。さらに、同じ学部・学科名でも大学によって研究内容が異なるといったこともある。

学問・学科研究は最終的には大学案内やシラバスなどを基に、LHRなどの時間を活用して個別に研究していくことになる。だが、生徒が自身を判断しにくいと思われる学部・学科の例を手引きの中にサンプルとして挙げておき、それぞれの学問内容を簡単に説明しながら、「学部・学科の内容を名前から安易に判断してはいけない」ことを伝えるのも一つの方法である。

調べるルートを 具体的に提示

職業研究の章と考え方は同じになるが、ここで求められるのは学問のすべてを正確に理解させることではない。生徒が誤解しやすい学問、学部・学科について、その代表例を挙げて説明することは生徒に役立つことだが、本筋はあくまで生徒が自分自身の手で調べ、自分の頭で考えることにある。自分で調べることで、学問、学部・学科のそれぞれの違いもわかってくるし、調べることを通じて自分の志望もだんだん固まってくる。手引きの目的は生徒が動くきっかけ作りにある。

手引きの中で実際に生徒に語りかける言葉としては「学問、学部・学科を先入観だけでとらえてはいけません。



まず生徒の関心を呼び起こすことが大切なので、生徒が興味を持ちそうな職業について触れておくのがよい。

どの職業を載せるのかという選択基準としては、まず高校生に人気があると思われる職業を選ぶのもよい。しかし、それだけでは偏る傾向があるので卒業生が就いた職業から選んでくるのもよいだろう。その際、先輩が具体的にどの大学、学部・学科に進んでその職業に就いたのかを合わせて掲載すれば、職業と大学、学部・学科とのつながりを生徒はよりリアルに感じることができよう。

例えば、経済学と経営学の違いがわかっていきますか? 大学や短大などで学べる学問にはいろんなものがありますから、興味を持ったものから自分で調べてみましょう」などが一例として考えられる。

生徒に調べさせる以上、調べるルートについてはきちんと提示してやっておく自分の力で調べられる環境を整えてやるようにする。具体的な取り組み、研究材料としては次のようなものがある。

- ・『学べる大学探せる事典』の活用
- ・大学案内、シラバスによる調査
- ・オープンキャンパスへの参加
- ・大学生による講演会
- ・インターネットでの大学HPへのアクセス

また、進路指導室には大学研究、学部・学科研究のためのいろいろな資料があるから、積極的に活用するように伝える。この際、進路指導室のどの棚にどんな資料があるかを示した見取り図を加えておくことによりだ。

資料である程度調べたら、一度書き出して整理するように指示しておくことも必要だ。職業研究の場合と同様に、手引きの中に生徒が学問、学部・学科について調べてわかったことを書き込めるスペースをあらかじめ作っておいてもよい。

5章 文理選択のしくみ

カリキュラムに沿って具体的に

文理選択は、3章、4章の作業を通して自ずと決まってくるのが本筋である。しかし、生徒の中には職業や学問への興味とは別に、科目の得意・不得意で文理選択をしようとする者もいる。もちろん、それも大切な要素ではあるが、それだけではなく、将来像と結びつけて選択するように伝えたい。

文理選択における注意点として、例えば看護学科の場合、文系でも理系でも受験できることがあるが、文系で受けるか理系で受けるかで、受験できる大学の選択肢が変わってくる。こういった例外的な学科もあることをつけ加えておく。

この章は、文理選択の一般論で終わるのではなく、その高校のカリキュラムに沿って文系コースと理系コースの違いを具体的に説明することを主眼としたい。文理に分かれるとカリキュラム面で具体的にどう違うかがあるか

例えば英語は適何時間になるか

・数Bはあるのかないのか、各科目の単位数はどうなるのかといったことを説明する章ととらえたい。例となるカリキュラム表を文理両方載せてコースによる違いを説明するほか、各教科担当が協力して科目の学習内容なども具体的に解説すれば、生徒はそれぞれのコースの中身をより深く理解できるはずだ。

6章 大学入試のしくみ

入試のしくみを丁寧に説明する

教師にとってはこれくらいは知っているが、当然と思える大学入試のしくみを、生徒は意外に正しく理解していないことが多い。教師が当たり前と思っていたことと生徒の入試に対する認識にはギャップがあることを念頭に、この章を構成したい。

したがって、ごく基本的な入試のしくみから丁寧に、正確に生徒に説明することがこの章の中心となる。手引き

の中で解説する項目には次のようなものがある。

- ・ 国公立大と私立大の入試制度の違い
 - ・ センター試験のしくみ
 - ・ 2段階選抜とはなにか
 - ・ 前期、後期、公立中期日程試験のスケジュールと併願パターン
 - ・ 推薦入試（指定校推薦と一般公募推薦）のしくみ
 - ・ 方式別入試とはなにか
 - ・ 地方試験とはなにか
 - ・ 傾斜配点、配点比率とはなにか
- ある入試制度の一例として具体的な大学名を挙げるときは、年度によって入試制度が変わる大学もあるので、入試の内容は年度によって変わることもあるので注意が必要」と、一言つけ加えておくことが大切だ。

ほかに国公立大と私立大の学費の違い、大学によっては学部・学科で所在地が異なることも書き添えておいた方がよいだろう。

なお、個別大学の入試制度について、生徒が自分で調べられるように資料を示しておくことも必要だ。各大学の入試科目を一望にした冊子を進路指導室や各教室に常備している高校もあるだろうが、それら入試関連の資料の見方を手引きの中で解説しておくのもいいだろう。

- ・ なぜその大学を志望したか
 - ・ 苦手科目克服法、得意科目伸長法
 - ・ 3年生の夏休みの過ごし方
 - ・ 気持ち落ち込んだとき、どうやって乗り越えたか
 - ・ 入試直前をどうがんばったか
 - ・ 合格の喜び
 - ・ 後輩へのメッセージ
- ただし、「いつから受験勉強を始めたか」という項目は設けない方がよいかもしれない。格好をつけて「受験勉強を始めたのは遅かった」と書く生徒が出てくることもあるからだ。また、実際に受験勉強の開始が遅かった場合も、普段の授業の予習・復習をきちんとやって科目の理解度が進んでいたから合格できたというケースがある。合格体験記からそこまで読み取るのは難しいので、この項目は注意が必要だ。

いずれにせよ、合格体験記依頼の用紙に「誌面の都合で加筆・訂正させてもらうことがあります」と書き添えておけば、好ましくない部分について修正することができる。

実際に手引きに掲載するときには、国公立大合格者と私立大合格者、文系と理系など分類して掲載していくと見やすくなる。また、実際はそう都合よく集まらないことも多いが、載せる数のバランスがある程度とれるように配慮

7章 成績の見方

偏差値の見方に注意を促す

高校の成績については、評定平均値とはなにか、どのように算出するかを説明する。推薦入試への出願条件を自分で確認できるように、評定平均値を学年ごとに書き込む欄を作っておいてもいい。

模試の成績については、まず偏差値とはなにかを説明する必要があるだろう。偏差値という言葉に中学校時代からなじんでいても、それが受験者集団中の相対的学力を示すものであることを理解できていない生徒は案外多い。

また、生徒は模試の結果について一喜一憂する傾向が強い。偏差値は模試の母集団が異なれば、同じ出来でも偏差値が変わりうることを、自分の力の推移を見るときは、同じ母集団のもので見なければならぬことを理解させることが必要となる。これについては、生徒や保護者の多くが理解できていないと考えておいた方がいい。

高校入試と大学入試では、模試の成績と合否との相関に違いがあることも触れておきたい。高校入試では両者が

しておきたい。

10章 保護者のページ

子どもと親の姿勢を強調

手引きを生徒が読むものと考え、現実的には前章で終わりであり、実際にそこで終わっても差し支えない。ただ、生徒の進路選択には保護者の協力が不可欠であるし、生徒への影響力も大きいので、特別編として保護者が読むページを組めば、手引きに新しい視点を打ち込むこととなる。

なによりも保護者に訴えたいのは、子どもと親の進路を考えると、その重要性である。進路について子どもに任せっきりにするのではなく、かといって親の希望を押しつけるのでもなく、子どもにとって最良の道をおいしく探っていくという姿勢をとってもらうようにする。そのために節目節目で親子で話し合うことをお願いしておきたい。

なお、遠距離の大学への進学に不安を持つ保護者は多いので、学費や生活費、大学卒業後の就職状況などに触れておくのもいいだろう。

かなり正確に対応して、合否分布の幅が狭いものに対して、大学入試はその幅が広い。多くの生徒は高校入試の経験しがなく、その延長線上で大学入試を考えているため、この点の理解が不十分なことが多い。度数分布表などを載せて、生徒に「合格者、不合格者ともにその偏差値の幅はかなりある」ということを実感させるのも一つの方法だろう。

8章 志望校、受験校決定

全学年に伝える内容として解説

学問研究 学部・学科研究を経て志望校を絞り込み、受験校決定へといたることになる。志望校については、大学、短大、専門学校で学べる学問内容のほか、入試の内容、卒業生の就職状況、どんな資格が取れるのか、学費などについても調べさせ、複数の志望校を挙げるのが望ましい。高校によっては志望校について生徒に調べさせてレポートとして提出させているところもあるが、レポートの項目（つまり、志望校決定における重要な視点）を手引きの中に掲げておいてもいいだろう。

9章 合格体験記

執筆者はバランスよく選ぶ

合格体験記はリアリティーがあるだけに生徒に訴える力が大きく、ぜひ手引きに掲載したい項目である。

手引きに掲載するために生徒に合格体験記を頼むとき、盛り込むべき項目をあらかじめ挙げておくと、こちらのねらいを外さないものができってくる。項目としては次のようなものがある。